

刻印



刻印

イエーバー川の氾濫による水害が起こつてから、数日経つた。

幸いにして僕の頭の傷は大したことはなく、二、三日で退院することができた。

その間に僕の側に付き添つてくれていた移民の少年、ジョセフと友達になつたり、慌てて駆けつけてきた学友のサーシャがそのジョセフの生き別れの姉である事が分かつたりと、色々な事があつた。

「サーシャはこれから、ジョセフと一緒に住むのかい？」

サーシャとジョセフと僕の三人で病院の玄関を後にしながら、僕は隣を歩いていたサーシャに聞いた。

「ええ、もちろんよ」

嬉しそうに微笑みながらサーシャは答えた。彼女は僕が退院すると聞いて、忙しい合間を縫つて来てくれたのだ。

「だけどサーシャ、君の下宿はたしか学生寮じゃなかったわけ？ 学生でない人間は入居できないんじゃないかな」

僕がそう聞くと、彼女は整つた顔をわずかに曇らせた。

「そう、それが問題。でも大丈夫、寮を出て学外のア

パートに引越すわ。安くていい部屋が見つかるとい

いんだけど」

「問題は、今からこの時期に空いている部屋があるかな」

空いている部屋があるにしても、手続きやら何やらには時間がかかるはずだ。どっちにしたつて当分は難しいだろう。

「そうね。新しい下宿先を探して、寮を引き払うまで最低でも三ヶ月はかかるだろうし。その間どうすれば……」

「俺なら大丈夫だよ。十四区にある避難所で、ほかの人たちと一緒に寝泊まりしてるから。引越したか、姉さんが大変だろう？」

僕の隣を歩いていたジョセフが言つた。確かに、働きながら研究が続けている彼女には何かと大変だろう。だけど、ジョセフが今寝泊まりしているのは仮の避難所のようなもので、そう長く滞在できる場所ではないのではないだろうか。

「ああ、それじゃあ、サーシャの新しい部屋が見つかるまで、ジョセフは僕の下宿してるアパートに泊まるのはどうかな」

「ザーギンの下宿で？」

ジョセフが聞いた。

「うん。狭い部屋だけど、ジョセフ一人ぐらいなら平気だよ」

「ザーギン、いいの？ 迷惑じゃないかしら」

サーシャが遠慮がちに僕に聞いてくる。

「大丈夫だよ、困ってる人には手を差し伸べるのが当たり前だろう？」

「そうね……じゃあ、私の引越し先が決まるまでの間だけ、お願いしていいかしら？」

「もちろんだよ。ジョセフ、君はそれでいいかい？」

「俺は大丈夫だよ」

「じゃあ、決まりだな」

そういうわけで、ジョセフは僕の下宿に引越してくるようになった。

大学の寮に戻るサーシャと別れた後、ジョセフと一緒に食料を買い出しに行つてから帰途についたので、アパートについた時は夕方になっていた。

僕の下宿しているアパートは、大学から歩いて十数分のところにあつた。四階建てのレンガ造りの建物はかなり古いが結露や乾燥もさほど酷くはなく、かすかな微臭ささえ我慢できれば中々いい住処だった。

「ちよつと汚いけど、遠慮なく上がつて」

「お邪魔します……つと。ここがザーギンの家かー」

招き入れられたジョセフは物珍しげに辺りを見回していた。教会で大勢の孤児達と一緒に育てられた彼にとつては、普通の家はあまり馴染みの無いものなのかもしれない。

「ちよつと待つてね、部屋を片付けるから。その間に買つてきた食料品を台所にある冷蔵庫に仕舞つてくれないかな」

リビングのテーブルの上は本や資料が散乱し、床の上には段ボール箱が積み上げられて、椅子の上にまで本が積み上げられていたりで、お世辞にも快適な居住空間と言えるような状態ではなかつた。

「うん、分かつた」

「終わつたら、冷蔵庫にジュースがあつたと思うから飲んでいいよ。コップは冷蔵庫の隣の棚にあるから」

ジョセフに買い物を渡すと、僕はリビングの掃除に専念することにした。

「ジョセフ、そつちは終わつたかい？」

ひとまずテーブルの上だけでも何とかスペースが空いた所で、台所にいるはずのジョセフに声をかけた。が、いくら呼んでも返事が返つてこない。

不審に思つて台所に行つてみると、ジョセフがテーブルの上に上半身を投げ出して突つ伏していた。

「ジョセフ、どうしたの？ 具合でも悪くなつたのかい？」

「うゝゝゝゝゝん」

声をかけても返つてくる返事は不明瞭で、どうも様子がおかしい。

顔を見てみると、ジョセフの頬にうつすらと赤みが差している。額に手を当ててみると心なしか熱っぽい気がする。熱でもあるのだろうか。いや、待てよ、まさか……

ジョセフの口許に鼻を近付け、匂いを嗅いでみた。

微かにアルコールの匂いがある。思つた通り、酔つぱらつているようだった。だがしかし、何でもた酒なんか飲んだりしたのだろうか。

その答えは冷蔵庫の中にあつた。ドアポケットに収納している飲料を確かめると、先ほどジョセフに飲んでいいよと伝えたつもりのリンゴジュースの瓶は未開封のままで、その代わりにリンゴのビールの大きな瓶がほとんど空になつていた。

（やつぱりか……）

思わず天井を仰いで額に手を当てた。瓶のラベルに

は青リンゴの絵が印刷されていたため、間違えたのだろう。

「ザーギいん、なんらあつたのおゝゝ？」

僕が冷蔵庫の前で頭を抱えていると、ジョセフが椅子から立ち上がり、おぼつかない足取りでフラフラと僕のところに歩いてきた。疑いようもなく、完全に酔つぱらつていた。

「ジョセフ、駄目じゃないか。子どもがお酒なんか飲んじや」

「えー、これがお酒えゝゝ？ ジュースだよ」

ジョセフが飲んだのはそう強い酒ではない。どちらかと言えばアルコール度数の低い、甘くて飲みやすい部類に入る。しかしだからこそ、普通の飲み物と同じ感覚でつい飲み過ぎてしまいやすい。ジュースと間違えて飲んでいたので尚更だ。現に瓶の中身は僅かしか残つていなかった。

「ジュースじゃないよ。これはお酒。似たような瓶に入っていたから間違えたのも無理はないけれど、飲んでいて気づかなかつたのかい？」

「だつて俺、こんなに美味しいもの飲んだことなくて……ねえ、もつと飲んれもいいれしよゝゝ？」

そう言いながら僕の持つ瓶に手を伸ばしてくる。僕

は慌てて瓶をジョセフから遠ざけた。

「もう充分飲んだらう？ これ以上は駄目だよ」

それだけでなくこれ以上酔っぱらわれてはたまらない。僕はさつさと瓶を片づけてしまおうと思ったが、今度はジョセフが抱きついてきて離れようとしなないめ、身動きがとれない。

「ジョセフ、ちょっと離してくれないかな」

「えー、やだやだ、離れたくないよお」

その間にもジョセフは僕にひしと抱きつき、猫のように目を細めながら胸の辺りに顔をすり寄せてくる。酔っているせいとはいえ、赤らんだ頬に上目遣いでそんなことをされてはたまったものではない。

だがそんな僕の内心を知ってか知らずか、ジョセフは更なる追い打ちをかけてきた。

「ねー、ザーギン、抱いてよー」

「なっ……!!」

一瞬、頭の中が真っ白になり、思考が全停止した。な、何を言っているんだ、この子は。

「抱っこしてー、抱っこ抱っこ」

……ああ、そういう意味か。そりゃ、そうだろう。安堵すると同時に、拍子抜けしたような脱力感が襲ってきた。

ひとまず手に持っていた瓶をテーブルの上に戻すと、ジョセフが僕の首に手を回してぶら下がるように体重をかけてきた。

「うおつ、と、と、と。こら、いきなりぶら下がったりして。重いじゃないか」

思わず抗議しつつも、膝と背中を支えるようにしてジョセフを抱き上げてやると、ジョセフは何が可笑しいのか肩を震わせて心底楽しそうにクスクスと笑っていた。

「駄目だよ、ジョセフ。子どもがお酒なんか飲んじゃ」

ひとまずジョセフを窘める。酒が入ると幼児退行して子どものような言動になる酔っぱらいはたまにいるが、どうやらジョセフもそのクチらしい。

「ええー、だったらザーギンは飲んでもいいのお？」

「僕はもう十八歳だからいいの。君はまだお酒の飲める年じゃないだろう？」

そう言いながら、僕は手近にあった椅子に腰掛けた。膝の上に横座りにジョセフを座らせると、彼は満面の笑みを浮かべて再び僕の首に手を回し、肩に頭を預けてきた。僕は半ば呆れ返ったまま、彼のしたいようにさせることにした。

酔った時の言動がその人間の本性だとはよく言う

が、それが本当ならば今のジョセフの言動は誰かに甘えたいという本心の現れなのだろうか。まあ、無理も無い気がする。つい最近、育ての親にも等しい存在だった神父様を亡くしてしまったばかりなのだ。心中はさぞかし心細かったことだろう。

それにしても、これだけ酒に弱かったというのも予想外だが、その上こうも酒癖が悪くてはどんなトラブルを引き起こすか、先が思いやられる。

「とにかく、君にはお酒はまだ早いよ。もうこんなことは勘弁しておくれよ」

だがジョセフは何の返事も返さない。そこで初めて彼の様子がおかしいことに気がついた。僕の肩に頭を乗せたまま、ぐったりとして動かない。

「ジョセフ、どうしたの？ まさか、本当に気分が悪くなったとか……」

そう呼びかけても反応がない。なにせろくに飲んだ経験もないくせに、あの大瓶を一人でほとんど空けてしまったのだ。悪酔いしてもおかしくない。

心配になった僕は、ジョセフの顔を覗き込もうとして、漸くそのことに気がついた。

ジョセフがスヤスヤと寝息を立てていたことに。

「……やれやれ」

ベッドに腰掛け、肩越しに振り返ってジョセフの寝顔を見ながら僕はため息をついた。

酔いつぶれて眠り込んでしまったジョセフを、僕は自分のベッドに寝かせていた。穏やかな寝息を立ててスヤスヤと眠る彼の表情は無垢そのもので、先ほどまでぐてんぐてんに酔っぱらって散々僕に絡んでいたものとは到底思えない。

思えば僕は最初にジョセフに会ったときから、その純粹さに惹かれていたような気がする。そう、彼はとても純粹で、真っ直ぐで、そして何より信心深い。自分より幼く、より弱い者達を守らなければならなかったからこそ、守りたいと思える心の持ち主だったからこそ、そう在れたのかもしれない。

僕はふと、自分に彼のような強さがあるのかどうか疑問に思えてきた。何一つ不自由なく、何の苦勞も知らずに育った自分は本当の苦しみというものを何一つ知らない。そんな僕が彼らのような貧しい者達を救うことなど本当に出来るのだろうか。

もちろん僕は自分の理想に確固たる信念を持っているし、そのために今まで弛みない研鑽を続けてきたと

いう自負もある。だが、その理想自体が世間知らずであるが故の傲慢な考えであるとしたなら、本当の窮地に立ったときに自分の力では何一つ出来ないのではないだろうか。そういった漠然とした恐れが僕の中にはあった。

「うん……」

ジョセフのかすかなうめき声に、僕は物思いから引き戻された。彼は相変わらずよく眠っていて、当分起きそうにない。もし僕が彼にとんでもなく邪な思いを抱いていると知ったら、彼は僕を軽蔑するだろうか。

そう。僕はジョセフを抱きたくてたまらなかった。さつきのように子どもをあやすようにではなく、性的な意味で。

僕はジョセフの純真さを心底愛おしいと思っているが、同時にそんな彼を徹底的に汚し、奪い尽くしてしまいたいという欲望も持っていた。その心は彼の事を知らずにつれてどんどん大きくなっている。ジョセフに己の欲望の徴を刻印し、僕の匂いをなすり付けてしまうことで、彼を真の意味で己がものにしてしまいたかったのかもしれない。それゆえに、これらの相反する感情は矛盾することなく僕の内面に存在していた。

「つくづく最低だな、僕は」

そんな自分が嫌になり、自嘲的に呟いた。

毛布の上に投げ出されたジョセフの二の腕に触れてみる。痩せてはいるが、その腕は思いのほか固く、筋肉がついていた。紛れもない男の子の腕だ。

正直、この許されざる思いは墓場まで持つていくつもりだった。ジョセフとはただの良き友でいたかつたし、自分の醜い、汚れきった思いをぶつけてしまふのは怖かった。彼の姉であり親友としても医学者としても敬愛しているサーシャも裏切りたくはない。だけど、絶好のチャンスを目前にして、その決意はほとんど崩れかけていた。こんな絶好の機会を逃してしまえば、後々まで後悔することになるのではないかと。

「いや、駄目だ、駄目だ」

悪い考えを振り払うかのように、軽く頭を振りながら再び呟いた。確かにジョセフは僕に抱きついたり甘えたりしてきたが、それは酔った勢いでしていたことで彼の本当の意志じゃない。第一、あ彼は大人に甘える幼子の仕草だ。彼に性的な意図があつてしたことじゃない。

だが僕の手はまるで己の意志に反するように、ジョセフの顔に伸ばされていた。右手の中指でそつとジョセフの上唇をなざると、かさかさした感触が指先に伝

わってきた。そのまま薄く開いた唇の間に指先を差し入れ、歯列をなぞる。それでもジョセフは目を覚ましそうな気配はない。

そう。少しだけならジョセフも目を覚ますことはあるまい。なにせこんなによく眠っているのだから。気付かれさえしなければ、僕らの関係が変質してしまうこともない。

僕はジョセフの上に身をかかめると、薄く開いた彼の口にそつと口づけた。そのまま舌を差し入れて、彼の口の中を満遍なくねぶる。さっきのリンゴ酒の匂いと一緒に、彼の匂いと味も一緒に堪能する。

「ふ……」

夢中になって彼の口内を貪っていると、ジョセフの喉の奥からかすかな溜め息のような声が漏れた。目を覚ましたかと一瞬ひやりとする。だが彼はそれ以上の反応を示すことはなかった。

ひとしきり堪能した後で僕はジョセフから離れた。気付かれない程度に少し味見するだけと思つての行動だったが、正直、これだけでは到底気が収まりそうにない。それどころかもつと先を続けたくなってきた。

次いでジョセフのズボンのボタンを外し、手を滑り込ませる。下着越しに触れた彼の逸物は、予想外の大

きさだった。パンツの上から握り込むように布の上からやわやわと愛撫してやつたり、軽くしごきあげると、手の中の彼の分身がじわりじわりと容積を増していく。ジョセフがかすかに「あ……」と声を漏らすのが聞こえた。

これ以上続けるのはいくら何でもまずい。ジョセフが目覚ましてしまう。僕の理性はそう警告していたが、本能に支配された僕の手はその警告をまったく無視するかのようジョセフの身体をまさぐり続けた。

「なに……してるの？」

気付いたときには全てが遅かった。顔を上げると、驚愕と戸惑いの入り混じった顔で僕を見つめるジョセフと目が合った。僕の手はジョセフの性器をパンツの上からしつかりと握り込んだままだ。

不味い。これはどう見ても言い逃れできるとような状況ではない。

「ザーギン！？　ちよ、ちよつと何してるの！？」

「あ、いや、その、違うんだジョセフ。これはその、つまり……」

しどろもどろになりながらも、何とかもつともらしい言い訳をひねり出そうとしたが無理だった。この状況、どう考えても誤魔化しきれない。そもそも、ここ

までしておいて気付かれさえないなければいいなんて、虫が良すぎたのだ。

「ジョセフ、本当にごめん。君があんまりにも可愛いもんだから、我慢できなくなっちゃったんだ」

「何でそうなるんだよ!? あんたおかしいんじゃないのか?」

ジョセフが戸惑いを隠せないといった口調で言った。そりやそうだろう。だがもうこうなつては後には引けない。そして引けないのなら、このまま先に押し進むしかない。

「そのぐらい、君のことが好きだつてことだよ。食べてしまいたいぐらい可愛い、つて言うだろう?」

「な、何だよそれ、わけが分からないよ」

「うん、訳が分からないと思う。こういった感情は、理屈で説明しようと思つても説明できるものじゃないからね」

「……」

どうやらジョセフはこの状況をどう理解したものか考えあぐねているようだった。僕は一旦、ジョセフにのしかかるような体勢から引き下がり、ベッドに腰掛けて座り直した。ジョセフもそれに倣つて僕の隣に腰掛ける。

しばらく微妙な空気が続いた後、ジョセフがおずおずと聞いてきた。

「何で、俺なわけ?」

「ん? どういうことだい?」

「だつてザーギンつてさ、姉さんのことが好きなんじゃなかったの? 姉さんのことが好きなら、何で俺にこんなことするのか、分からなくてさ」

「サーシャに対する好きとはまた別の感情だよ。彼女のことは女性としても親友としても敬愛してるし、とつても大切な人だ。だけど、君に対する感情はまた種類の違うものだと思うんだ。種類の違うものだから、どつちが本当とかどつちが重いか、そういう順序はつけられないよ」

ああ、分かっている。これは欺瞞だ。何もかも。

サーシャに対する思いがある種の崇拜にも似た気持ちであれば、ジョセフに対する思いは愛しい存在を汚して我が物にしてしまいたいという邪な思いだ。もちろん、ただの肉欲だけでなく、彼のことは魂から肉体まで全てをひつくるめて愛していると断言できるけど、僕がジョセフに対して抱いている思いは、やはりとも口に出して言えるような性質のものじゃない。

「うーん、やっぱり俺にはよく分からないよ」

「僕だつてよく分からないよ。けど、自分のことが何から何まで分かつてる人間なんていやしいと思うよ」

「そんなものかな」

「そんなものだよ」

再び無言の時間があつた。しばらく後に沈黙を破り、ジョセフの目を覗き込みながら語りかける。

「だからね、ジョセフ」

何だか自分が聖書の蛇にでもなつたような気がしてきた。実際そうかもしれない。僕はこのどうしようもなく罪深い感情を覆い隠したまま何も知らないジョセフを誘惑し、背徳の道に引きずり込もうとしているんだから。

「もし君さえ嫌じゃなければ、できればさっきの続きがしたい」

「続き？」

「そう。とても気持ちよくて、楽しい秘密の遊びだよ」

「……」

ジョセフは少し逡巡しているようだった。が、太股や膝を撫でさする僕の手を拒もうとはしない。興味半分、不安半分といったところか。

「嫌かい？」

「うーん、嫌つてわけじゃないんだけど……」

「なに、そんなに大した事をするわけじゃないよ。

ちよつとした親愛の情を表すじやれ合いみたいなもので、男同士ではよくあることだから」

そこで内緒話をするときのように声のトーンを落として囁きかけた。

「やつてみるかい？」

「……うん、やつてみる」

「やった！ 成功だ！」

思わず小躍りしたくなるのをこらえるのに苦労した。ひとまず第一段階は成功だ。あとは如何に嫌がられることなく事に持ち込むかな。

「で、俺はどうすればいいの？」

ジョセフが興味津々といった表情で聞いてくる。何だかんだで好奇心の方が勝つたらしい。

「僕に万事任せておけば心配ないよ。すぐに気持ちよくなるから。そうだな、ちよつとシャツをめくり上げてくれないかな」

「こう？」

丁度診察の時のように、ジョセフがシャツを捲り上げると、痩せてはいるがほどよく筋肉がついた胸板

と、引き締まった腹筋が現れた。

「男でも乳首は触ると感じるんだよ。人によつて差はあるけど。ジョセフはどうなのかな？」

ジョセフの胸に両手を伸ばし、両方の乳首を軽く摘む。そのままくにくにとこねくり回してやると、ジョセフがくすぐったそうに身を竦めた。

「あはっ、何これ、くすぐりたいよ」

しかし軽く引つ張つてみたり、指先で押しつぶしてみたりして尚もしつこくこね回し続けていると、次第にジョセフが太腿をもじもじとすり合わせ始めた。

「なんか、変な気持ちになつてきたんだけど……」

ふと思いついて上げさせていたシャツを元通り下ろした後、布の上から彼の乳首をこすつてみた。

「ああっ」

するとジョセフがびくりと身体を震わせ、声を上げた。

「なるほどね、君はこつちの方が感じるのか」

「え……ふあっ！」

左胸に顔を寄せ、シャツの上から乳首を口を含む。

思わず身を振つて逃れようとするジョセフの背中に片手を回して抱き寄せると、次いで強く吸い上げてやつたり、べろべろと何度も舐め上げた。

「あ……はあ」

続いて反対側の乳首も同様にして吸い上げる。そうやって散々舐つた後、口を離れた。改めて見てみると、濡れたシャツの上から乳首のところだけ尖つて見えるのが、なかなか良い眺めだった。

「それにしても、君はずいぶん乳首が感じやすいんだね。こんな薄着で外を歩いちゃいけないと思うよ、ジョセフ」

「いや……こんな変なことするの、あんただけだから」

「はは、そりやそうだ。とりあえず、服は脱いでしまおうか」

「え？ 脱ぐの？」

「汗をかくようなことをするからね。はい、両手上げて」

言いながら、ジョセフの服を脱がせていった。シャツを脱がせると、先ほど脱がせかけたズボンに手をかける。

「ほら、ちよつと腰を浮かせて」

ジョセフの欲望ははつきりと形が分かるほどに下着の布を押し上げてガチガチに勃起し、布の内側から先走りのしみを作っていた。その下着ごとズボンを脱が

せてやる。僕の眼前に晒されたジョセフのそれは形も大きさも申し分なく立派だった。半ば剥けかけた包皮の間から、可愛らしいピンク色の先端が顔を覗かせている。

「あんまり、じろじろ見ないでくれよ」

ジョセフは顔を赤らめて膝頭を閉じようとするが、僕が膝の間に身を割り込ませているためにそれも叶わない。

「恥ずかしがるようなものじゃないだろう？　こんなに大きくて、形もよくて」

「そういう問題じゃない」

「今は剥けてなくても、これだけ大きければそのうちきれいに剥けるよ」

「だからそうじゃなくて」

「ああ、君一人だけ裸じゃ恥ずかしいよね。ちよつと待ってて」

そう言いながら、僕もセーターとシャツを脱ぎ捨てた。次いでズボンのベルトを外し、パンツと一緒に脱ぎ捨てる。

「え、ちょ、ちよつと……」

ジョセフに覆いかぶさるようにしながら、彼の砲身に臨戦態勢になっている僕のを押し当ててみた。

「ほら、同じぐらいの大きさだ」

いや、彼の方がほんの僅かに大きい気がする。僕の方が年上なのに。少し口惜しい。

「こうすると気持ちいいだろう？」

「あつ……」

重ね合わせた肉棒二本を両手で包み込み、腰を前後に動かすようにして手の中でこすりあわせてやると、ジョセフが可愛らしい声を上げた。

「ジョセフもやってごらん。ほら、こうやって一緒に握って」

「こう？」

慣れない手つきでジョセフの両手が僕と彼の逸物を握り込んだ。そしてそのまま上下にゆつくりと動かしてしごき始める。

最初は恐る恐るといった様子だったジョセフも、次第に夢中になってきたらしく、次第に目に欲情の色を浮かべながら行為に没入し始めた。

「つぶ、はあ……」

ジョセフの手が僕のを扱ってくれている。その上、ジョセフが自分のものを扱って自らを慰めているところを同時に見ることができるのだ。その事実が僕をますます興奮させた。

「そうそう……気持ちいいよ。ジョセフ」

ふとジョセフが顔を上げ、僕の視線と彼の視線がぶつかりあう。その途端、彼は泣きそうな顔をした。だが彼の両手は止まることはなく自分達の肉棒を抜き続けている。自分の手で自分を慰めるという恥ずかしい姿を見られる羞恥心すら、快楽になつてゐるのだから。

「ザーギン……っ、も、もう……」

「つく、ジョセフ、一緒にいこう……」

僕の方も腹の奥から射精感がこみ上げてきていた。終わりが近づいているようだ。ジョセフの手の上から自分の手を添えるようにして扱き上げた。そして仕上げとばかりにジョセフのモノと僕のモノをこすり合わせる。

「あ、あああ、出る、出ちゃうよおお！」

「く……っ」

びゅるっ、びくん……

ジョセフと僕はほぼ同時に絶頂に達し、虚空めがけて二人分の精液を発射した。夥しい量の精液が後から後から出てくる。ようやく終わったその後も僕たちは身体を重ねたまま、しばらく何かを言う気力もなくなつていた。

「ふう、はあ……」

「いっぱい出たね、気持ちよかった？」

一息ついて落ち着いた後でそう聞いてやると、ジョセフは恥ずかしそうに顔を赤らめ、小さな声で頷いた。

「……うん」

「そう、それは良かった」

そうは言いながらも、僕はいまひとつ物足りなさを感じていた。ジョセフの身体の隅々まで見て、愛撫して、一緒に気持ちよくなつて、それで満足してもいいはずなのに、何かはまだ足りないと感じる自分がいた。

「ジョセフごめん、やつぱり挿れたい」

「へっ？ 入れるつてどこに……」

答への代わりに僕はジョセフの両膝が胸につくまで足を広げさせると、彼の肛門にぴちやりと音を立てて舌を這わせた。

「ちょ、ザーギン、あんたどこ舐めてんの！ 汚いだろそんなところ！」

狼狽したような声で叫び、身を振って逃れようとするが、生憎僕にそれを許すつもりはない。しつかりと彼の両足を押さえ込んだまま彼の尻穴を舐め回す。

「どこって、君のお尻の穴だけど？」

舌先で肛門の周りをぐにぐにと押す。元々何かを挿入するようには出来ていないそこは固く窄まつていて、ちよつとやそつとでは侵入できそうにない。

「そうじゃなくて、何でそんなとこ！」

「よくほぐしておかないと、挿れたときに辛いだろう？」

「い……挿れる！？　なあ、それってやつぱり……あつ、痛いっ！」

適度に肛門周りをほぐした後、おもむろに人差し指を肛門に差し入れた。だが彼のアナルはあまりに狭く、辛うじて第一関節は入ったもののその先がなかなか進まない。

「くっ……ほら、ジョセフ、力を抜いて」

「無理だよ……っ、い、痛い……」

うーん、やつぱり潤滑剤無しじゃ厳しいか。これが直腸検診なら専用のゼリーを使うところだけど、生憎今は手元がない。そうになると、代わりになりそうなのは……

「ちよつと待っててね」

一旦ジョセフの中から指を引き抜き、洗面所に走ると、鏡の裏の戸棚から小さな瓶をひとつ取って戻って

きた。

「それ、何？」

「ローションだよ。髭剃りの後に使うものだけど、潤滑剤にはなるはずだから」

ついでに取ってきたタオルをジョセフの尻の下に敷くと、ローションをたっぷり手に取って彼の肛門周りに塗り付ける。

「ひっ」

ローションが冷たかったのか、ジョセフが小さく悲鳴を上げた。ローションを塗り付けるようにしながら、アナルの周りに円を描くように揉みほぐす。

「今度はお尻の穴を開くように意識してみて。その方が楽に入るから」

再び指を挿入する。今度は穴が少し緩められる感觸が指先に伝わってきた。

「こう？」

「そうそう、その調子。緩めたり力を抜いたりしてごらん」

ジョセフが息を吐き出す時にタイミングを合わせながら、少しずつ指を奥の方まで侵入させていく。

途中何度か指を抜いてローションを付け直しながら、時間をかけて指を進めていくと、やがて根元まで

指が入るようになった。

「痛いかい？」

「はあ、はあ……最初に入れたときよりは、痛くない……ような気がする」

ジョセフが浅く息を吐きながら上ずった声で応えた。肛門は入れた指を曲げたり伸ばしたりして軽く動かしたりできる程度には広がってきたようだ。

「じゃあ、これはどうかな？」

ジョセフの中で指を動かし、指の先で腹側の腸壁の一点をまさぐる。コリコリした感触のそこを探り当てると、強めに押してみた。

「あああつ！」

ジョセフがびくりと身を震わせ、大きく目を見開いて啼いた。思った以上に効果は絶大のようだ。更に円を描くように押してみる。

「な……何、これ……ひいっ」

さつき出したばかりで萎えていた雄は再び硬さを取り戻し、すっかり勃ち上がってしまった。ジョセフは信じられないといった様子でその様を凝視していた。

「どんな感じ？」

指を更にもう一本入れてみる。更に緩んだジョセフ

の穴は僕の左手の人差し指も難なく飲み込んだ。

「な、何か、内側からおちんちんを触られてるみたいで、ムズムズする……何だよこれ。俺、一体どうしちゃったの？」

「ここにコリコリした場所があるだろう？　そこは前立腺と言つてね、男だけにある気持ちいい場所なんだよ」

そう言いながら更にもう一本指を増やす。親指で穴の入り口周りをぐるぐると半円を描くようにかき回してやると、ジョセフは目に涙すら浮かべながら身悶えた。

「ああつ、はあ……あ」

そうやってひとしきり彼の肛門を弄くり回した後、僕はおもむろに指を引き抜いた。

「も、もう止めちゃうの……？」

肩で息をして、ぐつたりとしながらも、ジョセフはまだ足りないといった物欲しそうな目で僕の方を見ていた。実を言うと正直、僕の方がそろそろ限界だった。さつきから散々ジョセフの痴態を見てきたお陰で、僕の息子は再び元氣を取り戻して限界まで張りつめている。

「そんなに良かったかい？　けど、今からやるのは

もつといいよ」

そう言いながら再びローションを手に取り、僕のいきり立った肉棒にたっぷり塗りと塗り付ける。それを見たジョセフの目が怯えたように見開かれた。

「ま、まさか、それ、挿れるの……？」

どうやら僕はこの子の身体にも精神にも魂にも、決定的に自分のものだという徴を擦り込んで刻みつけてしまわなければ気が済まないようだ。そのためにも彼の身体の奥深くまで僕のペニスを挿入し、ザーメンをたっぷり注ぎ込み、僕の子種と臭いをしっかりと染み込ませてやりたくてたまらなかった。

「そうだよ。そのためにしつかり慣らしたんじゃないか」

再びジョセフの両膝を大きく開かせる。ジョセフの肛門に僕の欲望の先端を押し当てると、彼は泣きそうな目で僕のことを見上げてきた。

「そんな……入らないよ、そんなの」

恐怖に怯えるジョセフを目の当たりにして、僕の中に僅かに残っていた罪悪感が疼いた。だけどここまできて止めることはできない。僕の欲望は既に引つ込みがつかないところまできていた。

「ごめんね、もう我慢できそうにないんだ」

そして躊躇う気持ちを振り払い、彼の肛門に欲望の先端をずぶりと押し入れた。

「痛つ、痛い、痛い……」

あまりの苦痛に目に涙を浮かべ、ジョセフが文字通り引き裂かれるような悲鳴を上げた。初めて男を受け入れたジョセフのそこはあまりにキツく、何とか入った僕のペニスの先っぽが押しつぶされそうだ。

「……つく、ジョセフ……っ、キツイ……もう少し、力を抜いてくれないと……」

「む、無理だよ……っ」

「力を入れないで、さっきやったみたいにお尻の穴を外に向かって開いてみて」

「わ……かつ……た」

その瞬間、締め潰すような緊縛が僅かに緩んだ。その機会を逃さず挿入を再開する。

「うう、くうう……っ」

その間、ジョセフは声を押し殺して挿入の痛みに耐えていた。ぎゅつと閉じられた目のはしから涙がこぼれた。

「ごめん、ごめんね……」

その間もジョセフの中を押し分けるように進んでいく。あまりの狭さに挿れているこちらにも気持ちいいを

通り越して痛いぐらいだ。だけどジョセフの痛みは恐らくこんなものではないだろう。

「はあ、はあ、はあ……」

やがて僕のペニスはジョセフの中に根本まで収まった。ジョセフはぐったりと身を投げ出したまま、息も絶え絶えといった様子で肩を震わせている。

「……くう、う……うう」

しばらくそのままの体勢で、ジョセフが痛み慣れるのを待った。その間に彼の中の心地よさを改めて堪能する。

ジョセフの中は、入り口こそ締め上げるようにキツいが、奥の方は絞り上げるように柔らかい、抱き締めるような締め付けだった。その感触だけで、痺れるような快感が脊椎から脳天にかけてぞくぞくと突き抜ける。

「か……はあ、ふう……う」

目に涙を浮かべて僕を見つめながら、苦しげな息を絞り出すジョセフ。そんな痛々しい彼の姿を見ているうちに、僕の中に仄暗い歓喜の念がふつふつと沸き上がってきた。

ジョセフの男として一番大切なものを奪い去ってしまった。無垢で純真な彼をこの手で汚してしまった。

そんなこの上なくどす黒い、略奪と破壊と征服の悦びだった。

「うう……」

目の端に涙を浮かべたジョセフが今一度、苦しげに喘いだ。どうやら今の興奮で、ジョセフの中の僕の分身が更に体積を増したようだ。

このままいけば僕は完全にただのケダモノに成り下がり、彼を一切顧みることなく欲望のままに貪りつくしていたかもしれない。だが僕は最後に残った一欠片の理性で、その衝動を押しとどめた。僕だけが快樂の向こう側に行ってしまったのは、ジョセフだけが置いてけぼりのまま苦痛に身を引き裂かれるだけだ。それでは僕の望むところではない。

「んふう……」

ジョセフの上から覆い被さるようにして彼の身体を抱き締め、唇を食った。ジョセフも僕の首と背中にも手を回し、強い力でぎゅつとしがみついてくる。そのまましばらく無言で互いを貪り合う時間が続いた。

「んく、ふうう」

最初は苦しげなだけだったジョセフの喘ぎ声にも、段々と鼻にかかった気持ちよさそうな吐息が混じってきた。舌を強く吸い上げながら、押し付けるようによ

り深く欲望を潜らせてやると、彼はくぐもった声で切なげに呻いた。

「ふう……ん、くふうう……っ」

そのうちに彼の方から強請るようにゆっくりと小刻みに腰を押し付けてくるようになってきた。どうやら彼も慣れてきたらしい。最初は狭かった中も不自由なく動ける程度には広がってきたようだ。

「もう痛くないかい？」

「ん、うん。大丈夫」

「じゃあ、そろそろ動くよ」

僕はジョセフを抱いた体勢のまま、かき回すようにグチュグチュと音を立てて抽挿を開始した。

最初のうちは肉がこすれる音だけが響いていたが、次第に抽挿の勢いは増していき、やがてはパンパンという肉をぶつけ合う音に取って代わっていく。

「あっ、あっ、うっ、ああっ、あっ、あああっ」

ジョセフの声も明らかに艶を帯びてきて、小刻みに突かれる度に小さく嬌声が彼の口から漏れる。二人の間に挟まれたジョセフの雄は限界まで反り返って勃起上がり、とめどなく先走りの涎を垂らして僕たちの腹を濡らしていた。

「ああっ、す、凄い、いい、いいよおお！ もつと、

もつとお……っ」

幼い顔を悦楽に歪め、羞恥の心など忘れてしまったかのようにいやらしい言葉を口にして、ジョセフが僕を求めている。そんな彼の痴態を目の当たりにして、僕の中で完全に何かが振り切れた。

ジョセフが何もかもを投げ捨てて、一心に僕だけを求めてくれている。彼をこんなふうにしたのは僕だ。そうさせているのは僕だ。彼は今、間違いなく僕だけのものだった。

「ジョセフ……っ、ジョセフ！」

僕もまた全てを投げ捨てて、ジョセフの身体を貪った。正に破壊せんとするが如くの勢いで、狂ったようにジョセフの全てを貪り喰らい尽くす。僕もまたジョセフと同じ獣に成り果てていた。

「あ、ああっ、壊れる、壊れる！ もう、おかしくなっちゃうよおお！」

僕もそろそろ終わりが近づいてきた。ジョセフに口付けながら、彼の中の一点に向かってより激しく腰を打ちつける。

「あーっ、あっ、あああ、あああーっ！」

その瞬間、ジョセフの体全体が小刻みに痙攣し、彼の中がぎゅつと締め上げられた。脳天を灼かれるよう

な悦楽に僕の意識は白く飛びそうになる。

「……………っ！」

腹にジョセフの熱い进りが飛び散るのを感じながら、僕はジョセフの身体をぎゅっと抱きしめると、彼の身体の奥深くに僕の精液をたつぷりと注ぎ込んだ。びゅくん、びゅるっ、どく、どく、どく……

「くうっ、あううっ、あふああっ……」

中に出される感触に、ジョセフが身悶えして甲高い嬌声を上げた。彼の中は射精の余韻で未だ蠕動を続けており、一滴残らず絞り出されるかと思うぐらい気持ちよかった。一体どれだけ出したのか定かではないが、自分でも呆れ返るぐらいその量は多かったと思う。

「はあ……はあ……」

「気持ちよかったよ、ジョセフ。どうだった？」

出した後もしばらく抱き合っていた。僕がそう聞いても、ジョセフは焦点の合わない茫洋とした眼差しで荒い呼吸を繰り返しているだけだった。未だ絶頂の余韻から覚めやらず、答える気力もないらしい。彼の中から肉棒を引き抜いてやると、白濁がぼたりと外にこぼれ出る。

「あ……ふう」

引き抜いた時、ジョセフが半開きの口から溜め息のような声を漏らした。今一度抱きしめてやると、彼の方からも僕にすがりついて抱き返してくる。そんな彼を目の当たりにして、改めてジョセフを自分のものにしたという実感がこみ上げてきた。

ジョセフの男としての性を踏みじり、自分の雄の徴を刻み付けて上書きし、蹂躪し尽くした。その甘美な征服の事実は、僕に言いようのない悦びをもたらした。

それからしばらく経ったある日。

「生意気言いやがって、こらっ」

「あははっ、冗談だつてばー」

とある昼下がり、ジョセフと僕はキャンパスの芝生の上でふざけてじゃれ合っていた。傍らにはサーシャもいて、おかしそうに笑いながら僕らのじゃれ合いを見ている。

結論から言うと、あれからも僕らの関係はさほど変わっていない。ただ、ああいうことを度々するようになったというだけで。最近では彼の方から行為をせがんでくるようになってきた。もちろん、これは僕たち二人だけの秘密だ。

当然ながら、今こうして隣にいるサーシャもこのことは知らないし、彼女にだけは知られたくない。できればこの先ずっと。

僕がジョセフに対して抱いている邪な気持ちは、サーシャにだけは知られたくないし、何より彼女の弟と関係を持つているなんてことを知られたりしたらどんな恐ろしい修羅場が展開されることか……いや、想像したくないから止めておこう。

「よし、こうしてやる、どうだっ」

僕はジョセフの固い黒髪をわしやわしやとかき回していた手を離し、彼の脇腹を思いつきりくすぐつてやった。彼は身体を折り曲げて身を振り、声を立てて更に笑い続けた。

「あはっ、あひやひや、くすぐつたいよ、もう止めろよ」

「あは、あはははは、ザーギン、もう勘弁してあげたら？」

ジョセフは笑いすぎてヒイヒイと過呼吸に陥っている。僕をたしなめるサーシャもお腹を抱えて笑っていた。

そんな彼らを見て、こんな穏やかな時間が、これからもずっと続いてほしいと、僕は心から願った。

F
i
n

後記

こんにちは、古道です。

というわけで今回は過去編ザージョセです。んでもってエロ本です。

14話においてサーシャとジョセフが病院内で再会した時と、3人でミューラー神父の墓参りしてる時、大学構内でキャッキュウフフのシーンは連続したシーンになってはいるけど同じ日にあった事でなく、別々の日だったんじゃないかと勝手に解釈しています。でもってジョセフとザーギンが会ってからブラスレ化するまで数ヶ月は時間の経過があったんじゃないかなと思っています。

眼鏡ショタだからということで、今回は征志郎さんに素晴らしくエロスな表紙イラストを書いていただきました。お忙しい中、本当にありがとうございます！

ザーギンがデジカメを持っているのは、以前私が「眼鏡は子ジョセフをハメ撮りぐらいしてそうだ。んでもってそれをサーシャさんがうっかり見つけてしまって大激怒とか」などと話していた事の名残です。その時点ではそのネタ導入するつもりでいたのですが、今回はボツりました。

というかそのネタでオチから書き始めたら、そのファイルだけぶっ飛びましたorz。これはもう姉さんの怒りが引き起こした呪いなのだろうか。

そういえば本文ラスト近くを書いている時にも「ツヴェルフで自らをふたなりに改造したサーシャに掘られるジョセフ」というネタが突如として浮かび、締切前にもかかわらず頭から離れなくて困ったことがあったっけ。ツヴェルフのサイボーグ技術を以てすれば、女性の性感帯と直結した義体ちんこ付けるぐらい可能だと思うんだ。鬼哭街の朱笑嫣みたいにな。

なんか色んな意味で、人として一番大切なものを無くした気がします、残念ながらそれは自ら捨てたものなので問題ありません。

2009年5月1日 古道京紗 拝

刻印

発行日	2009年5月3日
発行者	古道京紗
サークル	Pale Mag http://palemag.kazeki.net/ schwarzewald@gmail.com
表紙イラスト	征志郎 様 beat_the_gun@hotmail.com

Kargin / Joseph
Blasstreiter Fan Novel

Pale Mag
<http://palemag.kazeki.net/>